

四旬節第四主日

2016.3.6

ルカ 15・1-3,11-32

今日の福音は、わたしたちになじみ深い「放蕩息子」のたとえ話です。ルカ福音書に記されたこのイエス様のお話は、聞いているわたしたちの心にさまざまな感想や疑問を呼び起こす物語です。「イエス様はこのお話で何をわたしたちに語ろうとしておられるのだろう」。これが、このお話を聞いたわたしたちの最も率直で素朴な感想です。何故そのように感じるかというと、今日のイエス様のお話を聞いて、真っ先にわたしたちの心に浮かぶ疑問は、放蕩のかぎり尽くした末に、おめおめと帰ってきた息子を迎え入れる父親の態度はあまりにも甘過ぎはしないかということだからです。これでは、兄息子が怒るのも当然だとわたしたちも思ってしまう。しかし、わたしたちの心に浮かぶこのような思いは、イエス様からご覧になると、最も射た感想であり、疑問であるとも言えるかもしれません。イエス様は、わたしたちがそのような疑問や感想を持つことを承知の上で、そのようなわたしたちの反応を期待して、あえてこのような話をしておられるように思われるからです。これまでも、聖書の勉強会や黙想会の折などにイエス様のこのお話について話し合ったり、分かち合った経験をお持ちの方も多いのではないかと思えます。今日のこのミサにおいても、はじめてこのお話を聞いたときに心に浮かんだ感想や疑問を思い起こしながら、イエス様のこのお話をあらためて味わってみたいと思えます。

これまでわたしたちが聞いてきた、わたしたちの最初の感想や疑問に対する答えは、この放蕩息子のたとえ話でイエス様は、神様の愛とゆるしをわたしたちに示そうとしておられるのだということだったはずです。戻って来た放蕩息子を、待ち構えていたかのように駆け寄って抱きしめる父親は、罪びとであるわたしたちをその大いなるゆるしと愛の懷に迎え入れてくださる神様の愛そのものを示している。そのように説明されると、わたしたちにもある程度納得することが出来ます。けれども、イエス様の福音は学校の試験問題と同じように片付けることは出来ません。正解が分かればそれで済んだということにはなりません。問題はその先にあります。この放蕩息子のたとえ話で、イエス様がわたしたちに示しておられる神様の愛とゆるしをわたしたちがどこまで受け止めているかということが問題なのです。どのように受け止めたらいいいのかということが問題なのです。

わたしたちの多くは、イエス様のお話しの中の放蕩息子のように、父親である神様から財産を分与されたというふうには思っていないかもしれません。放蕩に身を持ち崩して、その財産を使い果たしてしまったとも思っていないかも

しれません。むしろ、兄息子のように父親の言いつけに従って、精一杯働いてきたという自負を持っているかもしれません。たまには友達を集めて思う存分はめをはずしたいと思っているかもしれません。わたしたちがこの話の中の兄のほうに同情を感じてしまうのは、自分は放蕩息子よりも、その兄の立場に近いと感じているからではないでしょうか。もしそうだとするなら、帰って来た放蕩息子を出迎えた父親の姿は神様のゆるしと愛の大きさを示していると言われても、話としては分かるが、それがこの自分に向けられている神様のゆるしと愛なのだとは、本当には受け止めきれないことになるかもしれません。

わたしたちがこのような思いになってしまうとすれば、それはわたしたちがこのイエス様のお話を倫理的に受け止めているからです。どういうことかと言うと、わたしたちはあの兄のように、放蕩息子のことを罪びとだと思っているからです。放蕩息子自身も食べることに事欠く落ちぶれた生活の中で、自分のしたことの愚かさを悟り、父の家のことを思い出して父のもとに帰ろうとします。自分はもう父の子と呼ばれる資格はないと認めています。つまり、放蕩息子は自分の非を悟って回心したのです。そのようにして父のもとに戻ってきた息子を父親はゆるし迎え入れてくれた、ここに罪びとに対する神の愛が示されているとわたしたちは思ってしまいます。それはそうに違いありませんが、イエス様が語っておられるのは、罪びとである放蕩息子の回心と父親である神様のゆるしという倫理的な枠を超えています。父親が帰って来た息子を抱きしめたのは、彼が回心して帰って来たからではありません。ただただ、自分のもとを出て行ったまま消息も分からなくなってしまっていた息子が帰って来てくれたからです。帰りを待ち続けている父親である自分のことを忘れず戻ってきてくれたからです。

父親が願っていたことは、息子との親子の絆を取り戻すことだったといえるでしょう。息子が戻ってきてくれたことによって、父親の身も世もないその願いはやっと実現したのです。だから父親はあのよう喜び出すことが出来たのです。

今日のミサの第二朗読ではこのような父親とその息子の親子の絆の回復を和解ということばで表現しています。このコリントの信徒への第二の手紙のことばを借りれば、今日の福音全体は和解の物語ということが出来ると思います。そしてコリントの信徒への手紙が述べているように、この和解は父親の方から息子に向かって無条件に差し出されている和解です。父親は息子が考えてきた謝罪のことばを遮るようにして、息子の首を抱き寄せるのです。

息子との親子の絆を確かめることを願う父親の思いは、弟へのあまりにも寛大すぎる父親の処置に対して腹を立て、日ごろの不満を爆発させている兄息子にも向けられています。日ごろ家にいるお前にとって、父親であるわたしのものはみんなお前のものではないかと、息子というよりは雇い人のような口の利

き方をする兄息子をたしなめています。父親がこの息子にも求めていることは、親子の絆の再確認であり、父親の愛情のもとにある息子たちとしての兄弟同士の絆の再確認であるといえるでしょう。和解とは父親と息子との親子の絆、そしてまた、兄と弟との兄弟の絆が回復されることです。今日のイエス様のお話は、父なる神様がわたしたち一人ひとりに求めておられる和解をわたしたちが受け入れ、神様が結んでくださった親子の関係、そしてまた、その父なる神の子らとして生きるはずの、わたしたち相互の絆を再確認することをわたしたちに促しているように思います。四旬節、わたしたちが目指すべき回心とはこのようなことに他なりません。そのためにも、神様からわたしたちの差し出された和解のしるしであるイエス様の十字架の愛のお姿にわたしたちの心の目を向けてゆきたいと思います。イエス様はわたしたちが回心したから、十字架に掛かってくださったわけではありません。むしろイエス様がわたしたちのために十字架に掛かってくださったことを知ったから、わたしたちは回心の道を歩み始めたのです。その回心の道を歩み通す恵みを願って、わたしたちの罪をおゆるしてください、わたしたちも人をゆるしますと心のうちに祈りながら、今日の四旬節のミサをともにおささげしたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高